

※熊本大学文学部総合人間学科の徳野真雄教授が考案した地域開発の手法。集落の聞き取り調査の情報を図式化し、10年後の地域の将来像を考える。

きくちふるさと水源交流館は、2000年に廃校になった菊池市立菊池東中学校の校舎が活用されている



水源の町 きくちふるさとについて知ろう

「ゴメンクダサーイー」
豊かな緑と水に恵まれた熊本県菊池市。市街地から車で約20分、目の前に広がる菊池渓谷のふもとにある水源地区。その一角で農業を営む中村文男さん宅は、いつもとちよっと違うお客さんでにぎわっていた。

「何人家族ですか？」
「お子さんとは同居していますか？」
「お孫さんはよく遊びに来ますか？」

畑で栽培した里芋の出荷作業に黙々と取り組む中村さん夫婦にそう尋ねるのは、JICA東京が実施する「住民主体のコミュニティ開発」コースの研修員たち。アジア、大洋州、中南米、アフリカのコミュニティ開発の現場で活躍するNGO職員や行政官など15人が、8〜9月にかけて、海を越えて日本の手法を学びにやって来た。研修に協力するのは、日本と開発途上国をつなぎ、住民主体の地域開発を支援する、一般社団法人あいあいネット。9月初旬、同研修のファシリテーターを務める長畑誠専務理事らとともに「きくちふ

るさと水源交流館」に滞在した。

この日は、菊池の町にどのような人が住んでいるか、「T字集落点検※」の手法を用いて、3チームに分かれて聞き取り調査を実施。交流館を運営する、NPO法人きらり水源村事務局長の小林和彦さんと地域ボランティアの原公臣さん率いるチームは、交流館裏にある細永地区の9世帯を訪問した。

「各集落の家族構成や年齢層、離れて住む家族との関係や地域内の相互扶助の現状を知ることが、地域が抱える潜在的な問題や解決の可能性に気付くきっかけにもなります」と長畑さん。まずは現状を確認し、このままだと10年後どうなっていくのか、そして、今後何を改善していくべきかを考えていくことが目的だ。

住民とともに学ぶ 地域と向かい合う

先進国であれ、途上国であれ、地域開発は世界共通の課題。日本も戦後、行政と住民が一体となり、さまざまな手法を用いてコミュニティの再生を図ってきた。その一つが、「公害」から「環境」のまじり変貌を遂げた熊本県水俣市が生んだ「地元学」。



地元学“から” 地域の良さを 引き出そう

まずは足元を見つめ直すことから始めよう。地元にある資源を活用し、地域活性化に取り組んできた日本。その独自のノウハウを学ぶため、JICAの研修員が熊本県菊池市を訪れた。



88才の緒方とよかさんのお宅を訪問。ウガンダの研修員フリー・ダイヤモンド・アムロンさん(左から2人目)は「こんなに長生きして頑張っている女性がいるのは素晴らしい。菊池の元気の源ですね」と感動していた

ないものねだりをするのではなく、土(地域の視点)に風(外からの視点)を吹き込みながら、地元にあるものに気付き、活用していこうという取り組みだ。

きらり水源村も2000年の発足以来、「地元学」を活用したまちづくりに積極的に取り組んできた。今回、JICAの研修員たちもこの「地元学」を実践。1日かけて集落を回り、地域の人とあるもの探しを行った。「自分の町を研修員に説明することで、改めて気付くことがたくさんある。とても貴重な機会です」と原さん。「皆さん、こちらがタジタジになるくらい質問してきますよ」と笑う。お昼には原さん宅で奥さんの手料理に舌つづみを打ちながら、この土地で生まれ育った原さん夫婦の話に耳を傾けた。

そして最終日の夜は、交流館で調査結果の発表会。「川や竹やぶなど、地域の人の手で適切に管理されてきた自然はかけがえない財産」「10年後はお年寄りももっと増え、お互いの助け合いも大変になる。介護施設などをもっと必要なのは」「先祖や歴史の価値を再認識した」など、研修員の率直な意見に、「私たち

が危惧していたことをスバリ指摘してくれた」と感心する地域の人々。「この町のために頑張らなければと気が引き締まるね」と顔を見合わせた。

ホームステイで研修員2人を受け入れた中丸ひとみさんは「皆さんの真剣に学ぼうとする姿勢には、本当に心を打たれました。最初は不安もありましたが、今では娘みたいな感覚。英語がでなくてもコミュニケーションはできるんですね」と感動した様子。「地域の人から聞く苦労などは、途上国の地域開発に確実に生かせるし、研修員の意見からも日本のまちづくりのアイデアが得られる。お互いにとって実りのあるものになれば」と、あいあいネットの壽賀一仁さんは期待する。

自分たちの住んでいる地域に変化を起こしたい。菊池の人も研修員もその思いは一つ。「菊池の人たちと過ごした時間は一生忘れません。国に戻って研修で学んだことを実践し、また絶対菊池に戻ってきて皆さんに報告したい」と研修員たちは口をそろえる。住民主体で取り組む「地元学」により、世界中の地域がより元気になることを期待したい。



(右)調査結果を説明するバヌアツ共和国のポップ・パレン・アタさん
(左)里芋農家の中村文男さん(左)に聞き取り調査。どんな小さな情報も地域開発のカギとなると、真剣にメモを取る

